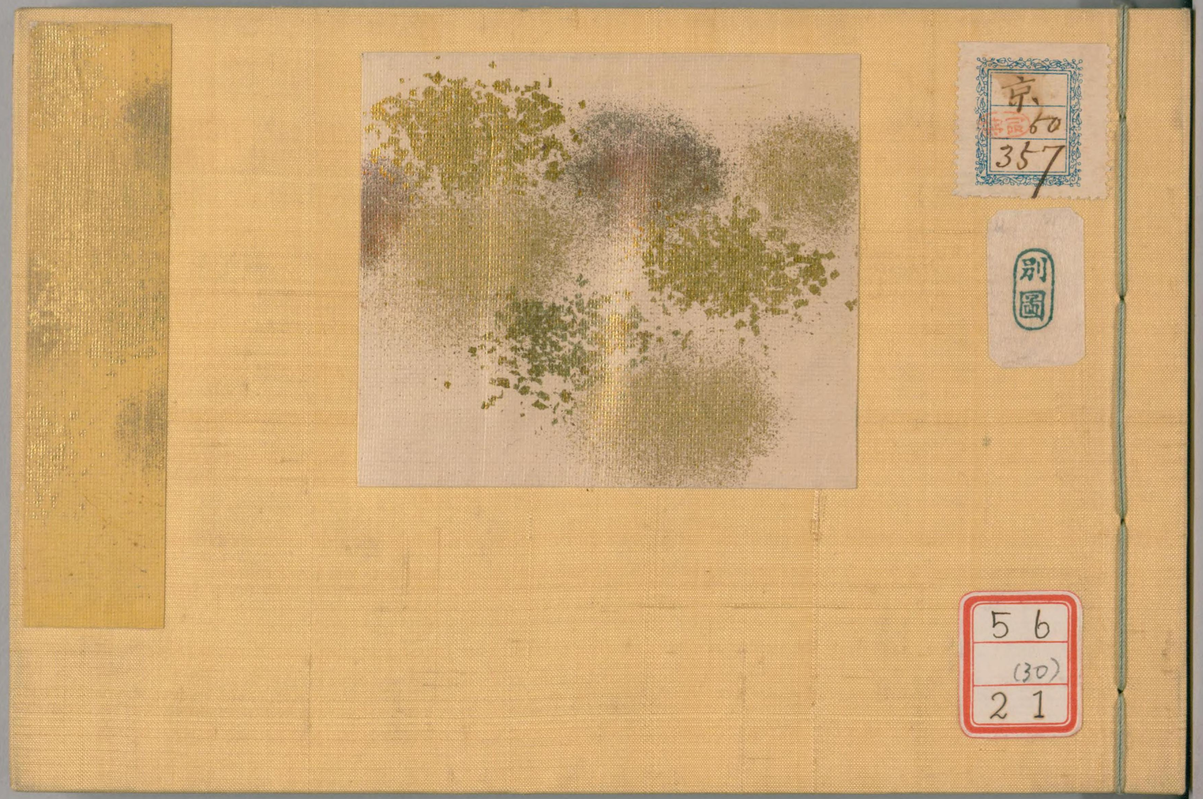

京
60
357
別圖
56
(30)
21

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

加茂

帝国図書館蔵書

大正
6. 4. 13
購求

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

加茂

装束之覚

初シテ　着付箔　唐織　カツラ　同帯
水桶　面藤波　ニサカリ　サヲサシ内
天女　面同断　着付織箔　カツラ
同帯　白大口　長絹　腰帯
黒垂　天冠　扇
扨シテ　面増　二ツユリ髪　同帯　着附箔
上着唐織　水桶　白羽矢作物　但シテ中入リスルト入レル
後　面大飛出　着附厚板唐織　半切　袴狩衣
腰帯　赤金入錦巻　赤頭　唐冠　笏
扇ニテモ

舞附

一声ニテ出シヅメ頭ニテツメ足シテ謡出ス惣テ高砂ノ通リ故ニ委シクハ不記

▲乃なくハト謡切リテ　ケヤ高砂ノ通リ舞臺ハ入ノ中ツレト向合居キ、三足下リヲキヲ謡出ス

乃河原小出なり（謡キリ正ツレもともに謡もよい）
人のよも　二人沖そこたの道ならん▲

秋程もなきの稲川　二人（ツレト向合）
きく露ふくもものもめる秋風の
吹も散なら紅葉かしあらいのちの
のかそ千年松神かめことも
ふる君の御ちもらぬ恵ありかな
たのむちらひ此神ふかき人の言を
深みよ　上ケ沖の底も
葉ちやく〳〵乱の葉のこともえより
初雪やりのくる親松もえりてよ
あまやらて　二人（ツレト入カケリ中ニ行正）
うきうの色ふつゝひ春なきみ
のの江のまくまたるうをもろうとも
らしく〳〵　ワキ詞　いかに若名乃海

女性ふるまひ事のおもしろくて（シテ詞ワキ）これ
はあらふしぎや（ワキ）なれはこの事
なり（シテ）何くよりのさし給ふてそ
（ワキ正）きふしんの候しるなくこれは相
国寺の住僧の使僧の者ふてそ
そしめて当社ふまうでの先そ是
なる池の辺をみれはあらしく壇
をつきて白木作の卒そとて
おまつるへき御作のきしきそうり
こんりうも何とやしたくしゆう
（シテ詞ワキ）相るもうの御事よりの条御
ふくうめ（正）みこれなる御卒そ当
社の御作とも御ぬ

女性ふるまひ事のおもしろくて（シテ詞ワキ）これ
はあらふしぎや（ワキ）なれはこの事
なり（シテ）何くよりのさし給ふてそ
（ワキ正）きふしんの候しるなくこれは相
国寺の住僧の使僧の者ふてそ
そしめて当社ふまうでの先そ是
なる池の辺をみれはあらしく壇
をつきて白木作の卒そとて
おまつるへき御作のきしきそうり
こんりうも何とやしたくしゆう
（シテ詞ワキ）相るもうの御事よりの条御
ふくうめ（正）みこれなる御卒そ当
社の御作とも御ぬ

（ワキ二度ツメル）御作しさせのひと
（ワキ正）実当りうきさ事うかねこ当
社の御秘かをひらく拝うあるへき
こうもりか（ワキ）つきて此卒の御
ふしくうりうのふし（シテ詞ワキ）御し
て御作のうちをあさしくなかやまぬ
とも（正）むらし此笠後乃里ふこその氏女
こそひしく人形かくなは此池辺ふ出く
そをとこ御ふまふ当そ
御のより御の卒一川御れまり
此ふ梅ふこ御りしをこうして御

（ワキ二度ツメル）御作しさせのひと
（ワキ正）実当りうきさ事うかねこ当
社の御秘かをひらく拝うあるへき
こうもりか（ワキ）つきて此卒の御
ふしくうりうのふし（シテ詞ワキ）御し
て御作のうちをあさしくなかやまぬ
とも（正）むらし此笠後乃里ふこその氏女
こそひしく人形かくなは此池辺ふ出く
そをとこ御ふまふ当そ
御のより御の卒一川御れまり
此ふ梅ふこ御りしをこうして御

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1
ガラス使用

又着うのゝきふさとあらしれも
もした曲招し男子をなりこの子
三笠もとし舟人まもとしてみか
ろくハ妙矢をきして如しまこの
矢もるもなるいうちをあり
天かあり沖をなるワキいうち
の神をなり ツヤ 正 もも母こもかみ
こなりて愛着こころの沖をうの
や シテ 左ワキへ をハとうの誠
の沖秘かれうかる 二人 ツレト向合
きまへいうかるもいましらまりや
たきの人のたあん中をつきを
羽の八百萬代のもも ワキ二足ツメ 子等

かのこともおこうもも ワキ 正
あるうやあこと矢そのほるま
うまのをかのうも矢まくも
羽中納言 ワキへ 正
シテ打 ワキへ 矢ふくふ雷しまつそハ
らしかのも ワキ 正 あうらかく
世も語るも シテ 回しるうとの程く
かヨ 芳茂の河原もうかる石乃
シテ ワキへ 正
ちる白川 ヨ 出る か茂川 シテ 又 ワキ二足ツメ
こうちにも ワキ うる石乃 上ヨ 正 石
川や矢の小河のきよきれハく
古ウケ
月もかれを石ねてそも世を
正一出
濁るも回しは乃 ヒラキ 浅うる石おこう

ワキ〳〵向ス正ニテ足トメヒラキ
ナシニワキハムキテモヨシ

て何うぞして　角ニ行　角トリ　年の矢の
左足リ
ゐるもをる光陰おしてもゆら
シテ拵キワニテ
ぬいまこの水浴れいまもつきこそ
正ヘヒラキ
ツレ二足ツメ
きねそまゐなりまする　ワキ下ゲ
右切ツレ
ゐをいまこそ　ニヨセ
右切正
くらや心
もいつもよきゝ如義のうへをれこかよ
ハめ身成ぬるなるらん　シテ何くその
正ニ二足出ヒラキ
岩根おねもとのきる清洲なれ
そ角ゐの春ある水やまゐ新川
化　右ウケ
あもなくみ〳〵しや井泊うれる
正ニ四足ホド出ヒラキ
紅葉のゐるる　シテ尚のうこゝ
ヤ
ヤ難波なる波もあかやなる浪
地　角ノ方ヘ行カヘリ足トメ　右ノ方ヘ向東ノ方ナレバ右ノ足ヲカケル
左ノ方ナレバ右ヘ足ヲカケ右ヲミヒラキ
清洲川のゐるまい　ゐ根の泊春ゐ

東ノ方ヲ高見
きねゐき　シテ　角ニ行　東ノ方ヘツヽクト出
よ　地　くまぬ角行角トリ　ゐ根のきゐなる
千ヒラ　左ヒリ
うゐるくうしゐは雪その見　地いつく
大ソノ前ニテ足トメ西ノ方ヲ見
く梅も　シテ　ゐ松うこそ　地　ゐれ
おひらくのくるゐも回し　紹
大ソノ前ニテ足トメ西ノ方ヲ見
おき　ゐの日光ゐのうつるそ
正面先出右足ヲミ出ヒ右ノ水桶ヲヒ前ニ出シ見左足
ヲミ出シナガラ下ニ居ナガラ水桶前ニヨク
うつるゐ新るる首おるら泊をなくそ　右ヨシ。
ワキ見合掌　正ヲ見合掌　送ニシテ立右ヘクツロギ中ヘ
ゐもゐもの沖のおろくまふよ沖の
二ヒラ左ヘトリ正向
二足下リ下ニ居正
ロ心くまふよ　ワキ打　貴雪くまき事
うゐ如松ふくしく浦見ゐ沖ゐ
き岑成人やらん　シテ打　淀ニゐる
ねろりこさ　ゐちるゐ沖ゐおゐもも
むきゐ雪ニ届りくゐを岸きの松

あまに返シニイル

後シテツレ

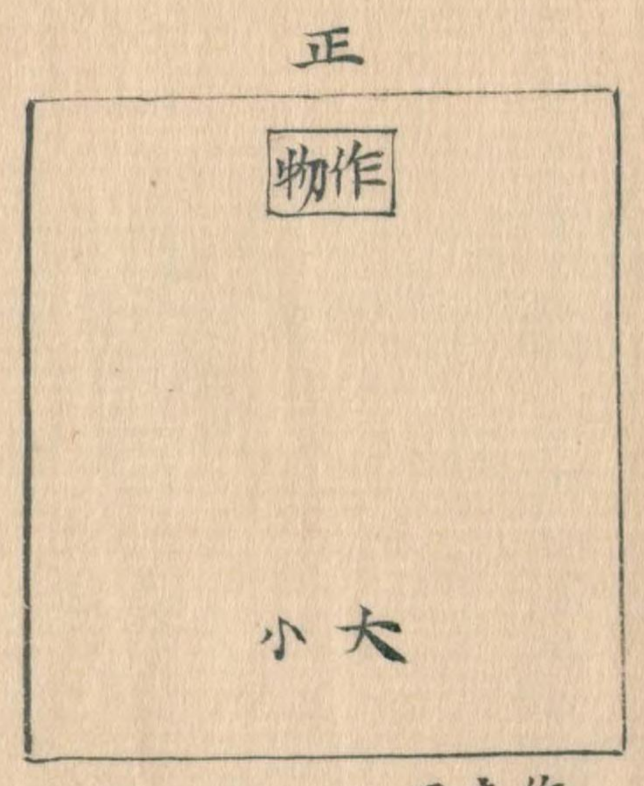
出羽越ノ次ノ頭ヲキ、切幕ノ内ニテ正面
請テモヨシ不請モヨシ出シテ柱ノキハニテヒラ
キ●ならさゝト謡イ●曇らぬヒラキ
●そけ時右ヘ二足出●時至所左右打込ミ
開●威光あまねし左ノ袖露トリ右ノ袖
露トル●さうごうたやうえ右廻リ右ウ
ケル●涌のあくりに出ヒラク●曲さや夕
ツハイ天女ノ舞 三段半囃子神舞ノ通リ
舞上リ左右ノ(左リ)袖カヘシ打込ヒラキ打返ニテ袖
カヘシ●加茂乃山るみ中左右打込ヒラキ●加
茂乃山おこみたらしの影出ヒラキ下ニ居ル
●みそりの袖左ノ袖出シ見ル●あふひて
水汲タルヤウニノ袖ヘカケルニツシテ●わくらふ
袖ヲ見ル●山河サシ廻シテ右ヘ廻リ●まの河
そりある ハシガヽリノ方ヲ見右ヲウケル●神
わ末現 ハシガヽリヘ向雲ノ扇ヒラキ早笛
ニカヽリワキノ上ミヘ居ル●此沖憲とシテヘ向

●ミをやの神る立テ楽屋ヘ入ル

波ノ模様金サシワタシ六寸程深サ七寸程

水桶

大小坐付ト白羽ノ矢作物出 作物出サズモヨシ



作物柱言間スミテ入ル

又

○ゆらい○は○法○天○皆○沖○と

ヲ○ヒヤヲヒヤ○ラ○ヒウ○ヤ○ヒウヤ○

幣ナシ扇ニテ舞時

●祢宜かまじ小正先ニテ左ノ足フミ込左ノ袖マキ込右ノ袖巻込ナガラ右ノ足フミ込大小ノ方ヘ向イ幕ノ方ヘ面キリ直ニシテ柱ノキワヘ行シテ柱ノキワニテ小廻リ袖前ヘナゲ●こゝろすかゞせヒラキ袖カヘシたまいとり右左トワキ正面ヘムカイ足ツメス工拍子左ノ袖モドシ扇タヽミ入 其余幣ノ舞方ト同断

●水桶入ル外ニテ水桶下ニアキ中ニテノ下ニ居ルト水桶取入ル

加茂

装束之覧

初　面増　二ツヲリ　カツラ　同帯　着付箔
上着唐織　水桶　白羽矢作リ物（但シテ申入ス ルト入ル）

連　面連向　其余シテ同断（但ソレハ一ツヲリ）

後　面大飛出　着付摩校唐織　半切　袴狩衣　腰帯
赤金入鉢巻　赤頭　唐冠　幣　扇シテモ

天女　面増　カツラ　同帯　着付箔　白大口　腰帯
長絹舞衣之内　黒タレ　天冠　黒骨扇

正

作物

大　小

大ト坐ケト白羽ノ矢作物出作物出サズトモヨシ
作物狂言間ヌシテ入ル

・シテソレノ附ハ矢田舞附ニ有之故不記
・水桶入ル入シテ水桶下ヨリ中ニテ下ニ居ルト水桶取入ル

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』 請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

舞附

一声ニテ出シツメ頭ニテツメ足シテ謡出ス惣テ高砂ノ通リ
故妻シクハ不記 ● あらなりと謡切リ正 ● 人の心をツレト
向合 ● 名ならんと謡切リツケテ高砂ノ通リ舞臺へ入中
略キ、三足下リワキヲ聞謡出ス ● 風を凉しきツレト向合 ● 海
よまさニテ手ヨリツレト入替リ中へ行正 ● 是ハ此のワキへ ● 実よ
く心得し 正

まくのそ ＼シテ 梅ハ飛梅乃神よわ ワキへ
此紅梅も情すくはらやかに見たなる此 正
又ハ当社乃御神木とも此神
みなもとも此御末乃此末なり
ト ワキへ ーー ーー ーー ーー ーー
あらさ面白る此末なりとも
ワキへ二足ツメル ーー ーー ーー ーー
偶然なるを語ひ給へ ＼シテ 正 ーー ーー
ーー ーー ーー ーー ーー ーー
さ此末の松梅も当社乃神
ーー ーー ーー ーー ーー
秘まとひく様も首へこそ
ーー 詞
ちみだりく此末此御謂あく ＼シテ ワキへ
かつりなよ爲し 勢て神

御神すとあさく尊ハ申たり
此もあらく一義を承もへ首 正
此賀茂乃里乃泰の氏安く

● 舞十シ扇ニテ舞時
右ノ足フミ込ミ左ノ足フミ込ミ右ノ足ヲメ
ヒラキ左ヘ右ヘ大小ニテヒラキ右ノ手ニテ
此ヨリ直ニ向キ前ヘツメ正面ヘムキ面向
ミツツマトリ此ヘヨリ左ノ袖ヲハネ返シ
右ノ袖ヲカツギ大小ニテヒラキ右ヘ廻リ
左ノ袖ヲ巻キ上ゲ ● 此手ハ此ヨリ舞事
余リニ同断

音此かもの里ニヨリ此近所ニテ正
向ヲル天子トワキへ
ひしまば此末御なる雷となか
ぞあまあらわ神となるぞあきらか

ちの神もあわれ
をも称せなりくがう
の神ぬとうや
くかわの縁の神祝い思なる
ぶりのうさまへもいうふ
ちうやたをれ人の
御代とつき白雨の八百萬代
心なり
や拍子も矢いうや
未の世よあうぬ
神祢なる得もめ
来よりく不審しめ

あくし何まも
も濁るも同一流也
よ賀茂の河瀬もかりる
不白川
うらもと
やをれ小河
月もなう
も濁るも同しにの
心りく何歌ひの
ろくもろふん
も海ぬいなの
つう級をあう
いなく水とくもや

[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1

ガラス使用

ツレ女 サキ 立 正面ヘ アトヨリ 出 水桶 太 モチ 出ル 一セイ 枝 掛 ミテ トメ ヨセ 足 左 太 トツメ 謡○

ロ 道 ナラン ト 謡ヨハリ ツレ サキ 立 シテ 謡 ワ ブタイ 内 ヘ シテ 往 ノ サキ シテ 足 トメ 左 太 太 ト サカリ 謡△

天 御手洗や清き心にすむ水の
賀茂の河原に出るなり すく 正面ヘ向
み杉まいる人のよるも神そ知れ
の道なるらん ▲なにかはゆくゑ
あつき日の数そ秋かとそ見る
さ御祓川風も涼しき夕波に 天 ツレト向合
ごろもとめる水桶のまちも頼みを
らぬ身まじあはき命のかぎり
ちはや振神にあゆみをとるとても
身のためを祈るとも思はぬ心の
秋誓ひはいつ神のよるべの水
とくまかせよ 上言 やや御手洗の
すゞしき夏の暮をやゞしく糺の森

の梢より初音ゆかしく子規
まださりがての行方なく今一通
り村雨の雲もかゝる夕
まぐれはやひ夏なき水の河隈に ツレト ヘ カハリ 中ヘ 行
きとも色の[illegible]しく 正面ヘムキ 立 居
下哥 いつも見なれの汲女性の身に今
手のは 是八沈わかりける ワキヘムク
見別山も御神にたかば何とよ
アもの御気請けたまはる 正面ヘムク
よくはんはおはかば見は拔別記
乃明神の神職乃者にてはなく
さしめく出社りまゐりては
つく見成河合と申すばかり

らく堰とうるおす白木綿よ白羽
の矢とぞ立てく剣の湯行わをさ
見ざるの姿いそも何ごとぞ
まくひそ（ワキ向）扱いまの神よ
（正面ムク）
矢の当社の御神ともいわれ
おもともぬれ御矢のおわしますなら
（ワキムク）
あらたまの神ともあがめ
（正面ムク）
湯行をさせひとへ
（正面ムク）
きぬまのお掛く当社の神
秘よとひく掛く者へこそう
ちぬぐるくは矢の御湯ぞ多く
かうりまよ
（ワキムク）
（シテ向）扱いて神

の御ようをあさく奉いり仕
ともおろく一義と存じく皆
（正面向）
此祭礼の里人衆の氏子ども
く人朝ありの御湯ぞ
水とうるおす神ぞ多向きする有
時のようり白羽の矢ひろう流
きまわばの掛ようりとう
ろくの竜の形よさんおろ
おもくと懐胎し男子とうり
び三柔とより時ぞまもの
く又いくべび矢とうて向
ひしび矢帰なる雷ぞあり
（ワキムク）
矢のあろ神とうるぞをいろ

ち乃神是なり　〽ちゝ母かんにこ
と神坐たりしが三ところ
乃神ふとりや　〽さやうに申をハ
ちく御乃ご誠の御殿ハ思なる
別ませこさまへもいふにおよバさ
志ゝ国らやたまきれ人の治めん
御代とつき白羽乃八百萬代
乃まと久まりくもぞ業に誠を
心なり　〽能ここさしハあはりさ
やあらこゝち矢ハ乃や露よみれ今
末乃世にあふらぬ末までもしれ
神跡たる謂をめ申よ
〽実よく不審しまふ隔を

あゝ何事も　〽おもしろうにくす
世も濁るも　〽同し流れ乃程を
よ　〽賀茂乃河瀬もかゝる名の
〽下ハ白川　〽上ハ加茂河　又その
うらゝかも　〽かゝる名の名川
やまかハれ小河乃さとのまにまにて
月もかゝるまと申すとかまく
むも濁るも同しにごり乃淺うわ
心なく何歎ひ乃有へさ河辺乃末
乃ながくもろともなん渡わたらく
も論わ思ハむかの水流れハやも
つらく級をわ思ふ〳〵向かわ
〽いざさく水とくまそよくむく

や心もいさぎよのさがなる戸無瀬乃川
瀬乃おとハ雨成たるらん
シテ 何くらの岩根松の志つく
あら瀧津流ハ白なミのとと
ある水や貴船川 地 水もさく
みつし大井河ぞまハ紅葉ハ雨
いとかる
嵐乃山乃戸無瀬
なる波も名にやあふらん
地 清瀧川乃水くまハ高根のこ
ゆきもとけぞへさ
シテ 朝日もら
あらしのよ 地 くもね高嶺
乃瀧浪ハ うきてかしらの雪
とのもゝ 地 戴く桶も手乃うへ

同
誰も志ら老のくらさも同じ
猶ありさらふ月を夢の現とさ
ぞうつつの影ハまことなりけり濁るとなく
そ水むすぶ乃神のちかひくま
無よの神ならん心ぞよ 実有
難きれるのかかが稀よ奏待ちあふ
げに身ハ此ぬ人成らん シテ 頃ハ
おろかなるや神哉をも
もむきて向へ其まのを君とちか
乃ご神徳をあまてらめ白露と
出し 上同 まつりや秋津洲くの真
とあらば浅猿やあさまに
名のかなんはよふなれ計ハまづに乃あるれ

難波

難波 装束覚

初シテ 面小牛尉（小尉ニモ） 尉髪 着付厚板 白大口 水衣 腰帯 扇 杉帚

連 放シ髪 着付熨斗目 大口 水衣 扇 腰帯

後シテ 三日月（アワ男 邯鄲男ニテモ） 赤地金入鉢巻 黒タレ 透冠 着付紅白段厚板 白大口 狩衣 腰帯 扇 鞨鼓ノ臺

天女 面連女 着付箔 カツラ 同帯 黒タレ 長絹 大口 腰帯 天冠 扇

前連ノ舞様

●シテ先ヘ立出橋ガヽリニテ足トメシテト向合詰足ノ謡フ雪ふるも正
梅ちらみ今籠りシテヘ向のどかなる気色かなト謡ニマイ先ヘ
立舞臺ヘ入リ中ヘ出立居ル●春つくる シテヘ向●此日様く
出ス シテト入カハリ目付柱ヘ行正ヘ向立居ル●まちまちワキヘ●
とふもかくかも治の風もシテヘ向まぬひくとはきワキヘ向
●なにふ難波乃梅のまゝ 正●暗やこの花乃舞乃遊
シ左ヘトリシテノ後口通リ笛ノ上ニ下ニ居●象りきて
すやワキヘ向●万まを人の正ヘ直シ●したゆしふ御夕ヘ
シテノアトヘツキ入ル

天女

●シテノ先ヘ立出シテ柱ノ内ニテ足トメシテノ謡ノ内待居立シ
ハトワキヘ向●神まかりワキヘヒラキ象文正●難波
ゆらまゝツエトリナガラ右ヘ廻リ右ウケ正ヘヒラキ あし
ろやタツハイ天女舞●梅ノつふ上ケまゝけて扇タ
タミナガラワキノ上ヘ行下ニ居●目出度シテノアトヘツキ入ル

●天女ノ舞三段目ヤリヤリノ処扇正ヘナゲテ右ヘ常ノ通リ
持サシテサク廻リナガラ角ヘ行カザシテ左ヘ廻ル右ノ通リ故
笛ノ譜ノ地ヒトクサリツマル

●初シテ来序ニテ入ル待謡無之

●天女居所ワキノ上ニナリ共笛坐ノ上ニナリ共シテノサシズ次第

左近郎舞附ニ有之装束附

シテ 面小牛尉 尉髪 小格子厚板 紙子腰帯 白大口 水衣カルトル
尉扇 杉帚

ツレ 放髪 熨斗目ニテモ無色厚板ニテモ 白大口 紋付腰帯
水衣 男扇サス 帚同断持タズ共

天女 面真盛増ノ類（ニサカリ） 箔 白大口 長絹 カツラ 同帯
黒タレ 天冠 腰帯 カツラ扇

後シテ 面邯鄲男 アワ男 三ケ月ノ内 段厚板 狩衣 黒タレ
白大口 腰帯 透冠 色鉢巻 神扇

●初ノツレ天女舞附矢田六ニアリ 市十郎ヘ為郎見被 此外処足鋪由申上ル

●シテノ持杉帚高砂ノツレノ持杉ノ帚ト同断

●鞨鼓臺出ル鞨鼓臺ハ梅枝富士大鼓ノト同断

●待謡アレバ来序ナシ左アレバ狂言間ハ語リ間ナリ末社ナレバ鞨鼓臺ヲ狂言ノ末社ガ持出ル右ノ通リ語リ間ナレバ鞨鼓臺ヲ持出ルモノナケレバ鞨鼓臺出サズ後見ニテ持出スト云フハナシ待謡ナケレバ来序アリ左アレバ末社出ル末社鞨鼓臺ヲ持出ル当時待謡アッテモヨシナシニモスル両様ナリ

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』 請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

●神舞タツハイスミ左右ノ時ニハチニ本共ニ右ヘ持●初段ノ上ゲノ前ニテ
ヤコンデバチ右ヘステ扇ヌキ上ゲ

又

むーあーーーーの系おーー

ルク

表序ノ待謡アッテ作物不出時ノ業

●鞨鼓ノヨウナブメイヘ入リシテ柱ノ先キニテ下ニ居ワキノ方ヘ向ツレノ
舞ヲ見テ居ルコト●おけを正ヘ直ス●うちあげ立●人ヲ
かけれハ右ウケ●ゆきを少々左ノ袖カヘシサシワケ右ヒリシ
テ柱ノキハニテヒラキタツハイ舞其余同断●くりていう右ヘ小廻リヒラキ左ノ袖
正先ニテ左ヘノリ込●めくりていう右ヘ小廻リヒラキ左ノ袖
カヘス●この方ホニ重ヒラキ ひろげる 其余同断

正

鞨鼓臺

ここへ入レル

正

鞨鼓ナキ時ノ業ノ圖

△此処ニテ天女舞フシテノ邪
魔ニナラヌヤウニ左ノ
方ヘヨッテニフ

シテ松波のようと舞座ヘ入此処ニ下居

舞附

●一声ニノ句キレ幕ヲ上ゲ杉帚右ニカタゲ前ヘサシ高
砂ノ通リツレノアトニ付一阿ホド間ヲヲキ出橋
ガリニテ足トメツレト向合ツメ足メ君ノ代ト謡出ス●
弐ベートト謡キリ正●名ノリツレト向合●気ベルト謡キ
リ杉帚ヘ左ノ手ヲ下ヨリツケ正向ナガラ杉帚ヲロシ
[redacted]右ノ手ニテ下ゲ杉帚下タヲ引ツラサル様少シウ
ケル心持ニテツケお時舞座ヘ入リ高砂ノ通リ打切
キレテ天下ベート謡出ス●皇のかしこきツレト
向合●名里まて此てノ字ヨリツレト入リ中ヘ行
正●おおさのタロキヘ●ぶーぬやな正●四海をヲキ
ヘ●天下の正●七上梅のツキヘ●ぶぶとひけ
ーー正

やうにして慈悲の流れ海にあまねくおほとも
見え所にさゝいしかあり（ナヒテ）見えきたれは民も又
（円 ワキへ）あらしおもしろとかくとやかくや（クセ 上切二正）高き屋にのほ
りて見れはけむりたつ民のかまとはにきは
いにけりと詠しまふけ給ふもありかたさ（ワキへ）
（上切二正）有かたや君の代とにたゝしと行るゝも
実にありかたき御めくみ国にあまねく三年
の御調もゆるされしも年月を経て捨られし浜の
あはれの数つもりつゝ今はあまたの御調物
ありかたかりしいにしへにをこたらぬ
の千秋万歳の末はこの君とたて給つる（ワキへ）
（上下正）御代は治れる御心にいつくしみ深かるへし
八島の外まて浪も静かなる難波山

の浜とりも遠き代の秋は大君の国治れるも
とこも栄へ行難波津の春の難波の梅か名
にしおふ匂ひも四方に普く一花開くれは
天下皆春なれや万代の始め安くそ見えてけれ（上切二正）（ワキへ）
（上ロンギ 地）けに万代の春の花栄へ久しき難波津
の昔語り面白き（上正）実名に知れし難波
津にさくの一声打しも小鳴鴬の春の世も
鴬鶯も奏さん（地 正）不思議や此里の誰なれしか
くかくる花の世を栄へそう知る事へき
（ツレ）我は知るや此梅乃春来る此花乃精（地）今
一人の老人は（ムテ）今も難波津に（円 ワキへ）住や
此花と詠し位をすゝめ先帝をし百済国の
（居立）王仁なるや（正向ナガラ立）今も此花に（正へ二足出）たちそへ鳴（右へトリツクロギ）

出端ニ後キヘ天女サキニ立テシテ跡ヨリ一同ホドワキ出ル左ニツ右ウケテ出ル一ノ松ニテ正ヘヒラキ進ヶト謡イ出ス

の声そへて来る鶯乃来る世もまたうら楽め　（シテ柱ノキワニテワキヘ向）

（ワキヘヒラキ）やへしや木外して待ちまへ花の志る暇しふ　（右ヘトリ中入）

待ちまへ　（後シテ上）進ゝろし春乃冬ハ東より来ると

しくも南枝花もしゑてひらく寒ハ前を西

の海辺まで（シテ右ウケ）難波の春の夜の月をそ出ま

（ワキヘ向）浦の家この原の薦ハおもしろや波ハし　（ワキヘヒラキ）

見しのよ方よ　（天女正）見ハ難波の浦小争を居

くひくの代くの恵みとそらくの比花咲

や照の御寿なり　（シテ）我ハ又百済国より

此国に渡り君をあらめ国をちる王仁なり

いりし桐人なり　（正ヘヒラキ）（上地正）まうし仁徳の御字

今ハ此代の境れ新をうつし　（シテ）治まる御代の

栄花をおしこそ　（地）此花の匂ひ　（シテ正ヘヒラキ）まうハひ

らん宮ことの楽のみとり　（地　左右ト下リ床机ニカゝリ正向ヲル）難波の事か法

ならぬ遊ひたはふれ舞ふとかや舞楽おもしろ　（トシテ　床机ヨリ立チ下ダメイ　ヘ入リ中ヨリ鞨鼓ノ）

（上天女）やゝ梅枝小きゐる鶯春かけて　（トシテ）かけた

（作物ノソバヘ行カツコヲ左ノ手ニテヲサヘ右ニテ撥ヲキ左右ニテ持チ左右ヘ手ヒラキ）

鳴ハ鶯の鼓の音もしてうちかへし　（両撥鞨鼓ヘソヘ右ニテ一ツ打　撥両手ニ持ナガラ返シニカツコ見ナ）

（ガテアトヘ下リ大ナリニ直ニテアトヘヒラキ）人もおもれハ君の代小　（正ヘ面ナヲス）（地）かさし数そ　（左ヲウケナガラ左ノ手出シ正ヘ出正先ニテ左ノ袖ヲキ込右ノヒザツキ左ノヒザ立）

◁天女ノ舞三段メアタリニテ両楽中スル

（トシテ　左ノ袖ヲ返ヘアテルヤフニテ左ヘヨリカヽル心持ニテチムルコヽロ）時ちの節もり　（地）（立角ヘ行）おれそら八難波の滝もひ　（シテ　角ニテ正ヲ一寸ウケヒビキト面下ゲ鐘ヲ少コヽロ）

（地　左廻り）浦ハうしほの　（トシテ）流れも急しく入　（地　中ニテ正ヘヒラキナ）

（ガラ右ウケ右ノ方ミル）江の松風　（トシテ）村あしの葉おとに　（コノ拍子ナシテギスキニテスム）（上地）いろを　（左ノ袖カヘシナシウケ）

吹くも佐ひのうんこゑもし難波の春た　（大小ノ前ニテヒラキ）（作物ノソバヘ行）

こ滝の数代あり及りや　（カツコウツ）（二ツヒリヘニテ）（上ロンキ地　跡ヘ下リヒラキナガラメツバイ）あ西ふの　（ニクツロギ正）（神楽ノアト左右打切）

神楽

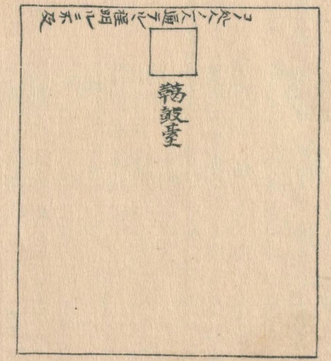
音楽や時の調子小かなふ来る鶯乃

来をハ　（バノ字ニテモツレフミヒラキニツアヲリドゴコロ　上シテ）春風ともろともに花をちら　（右ノ手外ニテニツアヲギナガラ正ヘ出）（ヒラキ）

しても鳥とうた　（地）（右ウケ）秋風楽ハいつまや

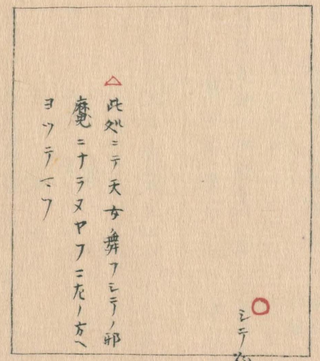
リシテ柱ノキワニテヒラキタツハイ無其余同断●シリテいうち正先ニテたへノリ込●かへりてハなへホセリヒラキ左ノ袖カヘス●この書ぶ二重ヒラキひざまづく其余同断

正



鞨鼓ナキ時ノ業ノ圖

正



国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

獣ハ君の國なれバ土も木も栄
色さそふ難波津乃國の難波乃梅の名
仰ぐ昔ひとの四方に普く花の
今ハ天下治まる御代や萬代乃
花安全そめく君をも万世
乃春の花も常盤の…きみかの津乃
言語にて面白さ　実かみにおふ
難波津の鶯の一声も知らぬ鶯乃
春の曲を囀りて来らん
やがて見れバ花の曲節
楽とかう謡ふべき　我も…ても
此梅の花乃精と人
老人ハ今ぞ現れ難波津に

舞附

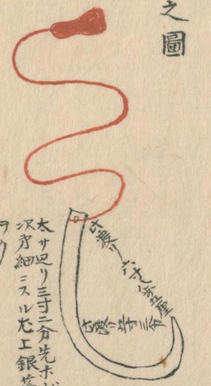
一声ニノ句ヲキヽ幕ヲ上ゲ杉帚右ニカタゲ肩前ヘサシ高砂ノ通リツレノアトニツキ一間程ヲキ出橋ガヽリニテ足トメツレト向合ツメ足シテ君ヶ代ト謡出ス●歩ミくしトウタイキリ正●冬籠リツレト向合●気色かと謡キリ杉帚ヘ左ノ手一寸ツケ正向ナガラ杉帚ヲロシ[redacted]右ノ手ニテ下ゲ杉帚下タヲ引ヅラサル様ソレウケル心持ニテツヽケ少時舞臺ヘ入リ高砂ノ通リ打切キヽテ夫天長くト謡イ出ス●皇のかしこき代ツレト向合●御里まで[redacted]此てノ字ヨリツレト入カワリ中ヘ行正●古あふのヲワキヘ●ふしきやな正●御姿をワキヘ●夫大きの正●上ッ上梅のワキヘ●御代をひらけし正●とよそくよそツレト向合●名木ヶとのワキヘ●ヲあくら君ワキヘ二足ツメル●実ミ難波の正●夫社帝をワキヘ●御即位ありて正●今社時なワキヘ●天下の正●帝を花ごワキヘ●難波をワキヘ二足ツメル●難波津ニ正●今ハ春辺右ケケ●吹来る花梅の正ヘ直シ出●あらさね御代ヒラキ●実や津の角ヘ行●難波の寺ニ角取リ左廻●実たひ汐さシテ柱ノキワニテワキヘ二足出開キ返シニ中ヘ行寺砂ノ通リ下ニ居立帚ステ正ヘオナシナガラ扇ヌキ右ニモチ正向キヲル●我らし私とワキヘ打切ニ正●示くそワキヘ打切ニ正●ちとこのワキヘ●後ハ啓き正
実なひろき流めあんれト中ヘ行下ニ居扇ヌキ持ト水衣ノ袖トキヨロス

玉の井

装束之覚

初シテ面増　カツラ　同帯　襟紅白
着付箔大モヨ　唐織壺折　黒骨扇
ツレ　面ツレ面　真条シテ同断　水衣ニ銀ダビ
黍之丈　面ツレ面　カツラ　同帯　黒垂
天冠　着付箔　大口　長袴
腰帯　扇腰ニサス　玉ノ二ノ鎖金ニテ
後シテ　面大悪尉　白地錦巻　厚板唐織
半切　狩衣白地　紋腰帯　神扇
カセ枝　釣バリ　龍　龍立
作り物　井筒　モナノ木サカキニテモ
後シテ用ル龍明和年中左近大龍教経領候ヨリ玉ノ井ニ用ル大龍壱之候ハヽ龍立ニテ宜シ大龍壱之以前ハ一通リヨリサシ大ナル銀龍用イ来ル由申上ル

釣針之図



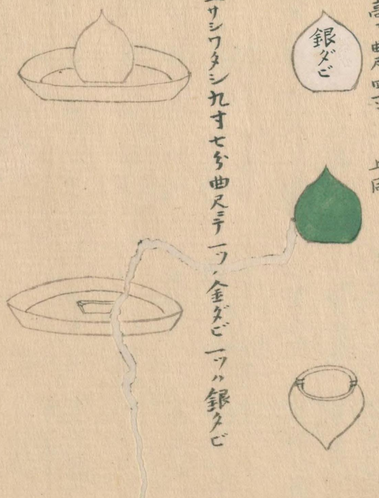
国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1
ガラス使用

シテツレ附

水桶右ニモチシテノ先ニ立真ノ一声ニテ出一ノ松ニテ足トメシテヘ向ツメ足シテ謡出ス●老うかうか謡キリ正●ゑもそくみふシテヘ向●水もらん謡キリブタイヘ入リ中ヘ行正●某乃あシテト向合●ふうきゑうそシテノ左ノ方ヨリ入カワリ直ニ目付柱ノキハヘ行正●荒きかたやワキヘ●いやさ見ハテそ正●ワれをそうとめワキヘ●たくいまたヘトリシテノ後ロトラリ笛柱ノ上ヘ行下ニ居●シ袖をまくり立大ナリニ三足出テ大ヨリシテノアトニツキ入ル

玉高ノ曲尺四寸　上同

銀ダビ



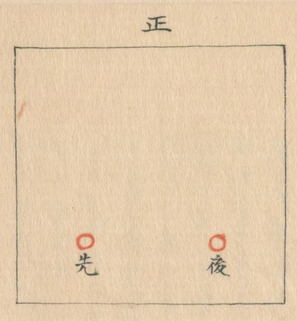
盆サシワタシ九寸七分曲尺テ一ツ、金ダビ一ツハ銀ダビ

天女舞附

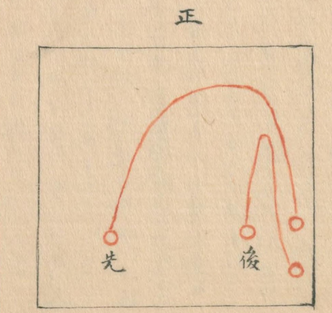
●天女二人一人ハ銀ノ玉盆ニノセ両手ニテ持一人ハ青キ玉盆ニノセ両手ニテ持セイノヒクキ者先ニ立アトノ天女一同半ホド同ヲヲキ出端ニ脇幕アゲ出先ノ天女一ノ松ニテ足トメ二人ワケ者ヲうちゑト謡出ス●各ゑを天尺正向返ヨリ二人尺フタイ八入二人尺地謡正向立ナラビ●玉盆ヲ取ルシ二人尺正ヘ出ラキ●彼約そくを二人尺正先ヘ出カケ直ニ右ヘ回リシテ柱ノキハニテ二人同シ様ニ幕ノ方向キ物ヲセよトヒラキ此処謡面引合見ルヘシ大ベシニナリ左ヘトリ少サクキリ〳〵ト足リ笛柱ヘ向テ行笛柱ノ上ニテ右ヘトリ正ウケ二人立ナラビ居ル●波ゑ波ゑるノ返ヨリ出ワキツレノ前ヘ行下ニ居ワキツレノ前ニ二人ナカラ玉ヲ下ニヲキ扇ヌキ持立右ヘトリ左右ト袖ノツユトリナカラアトニツキ出タル天女ハ太コ坐ヘ行先ノ天女ハ小鼓ノ前ヘ行二人尺左ヘトリ正向舞ヲハトヒラキタツハイノメ舞ニカヽル舞三段鶴亀ノツレ舞同断●舞ノアト左右打込ヒラキ右左ノ袖カヘス●何ゑそ地ゑる中左右打込ヒラキ●月そ出ゑを天尺正ヘ出ヒラキ扇タヽミナカラ左ヘトリ笛柱ノ上ヘ行右ヘトリ正向天立ナラビ二人ヒザトヒナトシツキ舎一ニヨニ下ニヲル●シテノ舞働ノ内ニ扇前ニサス●たてまわらんとはとめヲヨリ二人尺一ニヨニ立ワキツレノ前ヘ行下ニ居テ玉ヲ両手ニテ持立右ヘトリワキ

ノアトニツキ入ル

舞皇ハ二人立ナラフ処ノ圖



彼約ソ定ル正先ヘ出右ヘ回リ二テ
柱ノキハニテ幕ノ方向カヘテ
トヒラク処ノ圖



●玉ノ井半離子ニハ不革

●カセ杖長サ立テ乳通リヨリ六ツニ赤キ切ハ用イ次廣キ目ノ切ハ
二テニツ

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1

ガラス使用

初ニテ舞附

●水揃右ニモテ加茂ノ通リ真ノ一声ニテ出ニツメ次ニテツメ足ニテ
ちりかきト謡出ス都テ高砂ノ通リ●老ちりか謡キリ正●よ
もさみふツレト向合●あなうれト謡キリツケニテ舞直ス
入高砂ノ通ニ三足出中拏ニテ三足下リヲキヲキヽテふこう
なきト謡出ス●某のあるツレト向合●名々なるべき宮の井の
の字ヨリツレト入替リヤヽ行正●人伺ふとたる正ヽ出井
筒ノソバヘ行左ニテトメ居ヲ
見●そをいうるる面亦ニテ
正●荒ちろうやワキへ●今
●実ぴぶ審を正●あろし
●豊玉姫ワキへ●たらひふまり
●うやおやワキへ●ゆやおこけて二足ツメ●打切ヨリ
左ヘ出リテ柱ノキハヘ行●あなうれのなるか正ヘ
ヒラキヒラカズ左ヨリ返ニワキへ●当中ヘあらし
ヘヽ中ヘ行正向下ニ居ル水揃下ニテクル後見トリ入ル

サシ 神まれたるくさひめうきうえのつゆ
ロ だうえのやてりかやき雲はやへたく
こをしき芝をたゝみしめりてかまり
そゝろ乃うきふつゝかつゝ陰ワキへ乃
玄翁を清り給ふ名我あうえ乃
計をかりそめかうら流出ゆく黄ま
らおくるき由を歌き給つと真ノ
ゆ足ハそゝしそふかくふせうとを
そゝめけまくまたきゝ心乃いれら
んと謡リ給へハそれかこ帝ワキへ
名百せまつてうちんを召つて清國ワキへ
ようしやへしシテ狂こ乃うえ乃いうり
ゆくハ日陰清玄ひる時をつのあと

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』 請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

玉の井

装束之覧

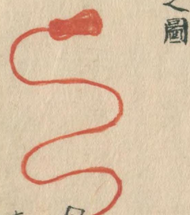
初シテ　面増　カツラ　同帯　襟紅白
着付箔大モヤウ　唐織赤地　黒骨扇

ツレ　面ツレ面　具余シテ同断　水桶二ツ　銀タビ
天女二人　面ツレ面　カツラ　羽衣　黒垂
天冠　着付箔　大口　長緒
腰帯　扇腰ニサス

後シテ　面大悪尉　白髪　白地鉢巻　厚板唐織
半切　狩衣白ク　紋付腰帯　神扇
カセ袴　釣バリ　籠　左
作り物　井筒　モテ木サガキニテモ

後シテ用ユル籠明和年中左近大籠致拝領候ヨリ玉ノ井ニ用ル大籠ト云候ハヽ籠左ニテ宜シ大籠ト云ハヽ一通リヨリ少シ大ナル銀籠用イ来ル由申上ル

釣針之圖

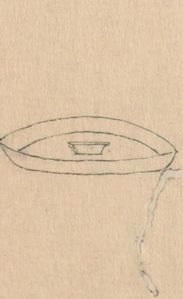


国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1
ガラス使用

シテツレ附

水桶右ニモチシテノ先ニ立真ノ一声ニテ出一ノ松ニテ足トメシテヘ向ツメ足シテ謡出ス●光リうの謡キリ正●ふもさ云ふシテへ向●水ぐらん謡キリブタイへ入リ中へ行正●某乃みシテト向合●ふうさ云うりセシテノ左ノ方ヨリ入カワリ直ニ目分柱ノキハへ行正●蔦をかくやワキへ●いやさ是ハこそ正●りんをせうとめワキへ●たらいはたへトリシテ後ロトラリ笛座ノ上へ行下ニ居●そ後をまとせ立夫ナリニ二足出テ夫ヨリシテノアトニツキ入ル

玉高サ曲尺四寸　上同



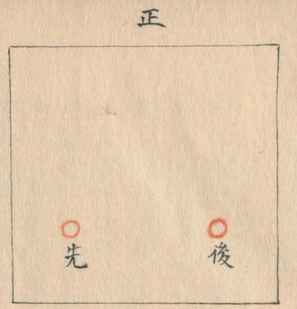
盆サシワタシ九寸七分曲尺ニテ一ツハ金ダビ一ツハ銀ダビ

天女舞附

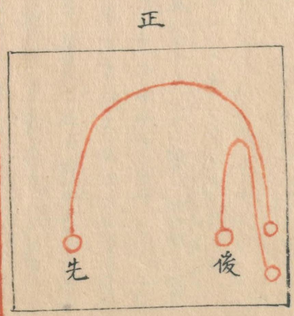
●天女二人一人ハ銀ノ玉盆ニノセ両手ニテ持一人ハ青キ玉盆ニノセ両手ニテ持セイノヒクキ者先ニ立アトノ天女一間半ホド間ヲヲキ出端ニ成幕ヨリ出先ノ天女一ノ松ニテ足トメ二人向合考うちるト謡出ス●常座ニ二人共正向返シヨリ二人共ワタイへ入二人共地謡正向立ナラビ●盃設ル二人共正ヘ出ヒラキ●そのかさけ二人共ワキへ向●彼物もちを二人共正先ヘ出カケ左ニ右へ呉ノシテ柱ノキハニテ二人同ジ様ニ幕ノ方向キ物をかへせよトヒラキ此処圏面引合見ルへシ大ベニナリ左へトリ少サクキリ〳〵ト呉ノ笛座へ向テ行笛座ノ上ニテ右へトリ正ウケ二人立ナラビ居ル●唯そのほ物ノ返シヨリ出ワキツレノ前へ行下ニ居ワキツレノ前ニ二人ナカラ立ヲ下ニラキ扇ヌキ持左右へトリ左右ト袖ノツユトリナカラアトニツキ出タル天女ハ太コ坐へ行先ノ天女ハ小鼓ノ前へ行二人共左へトリ正向舞ふふトヒラキタツハイメ舞ニカヽル舞三段雪亀ノツレ舞同断●舞ノアト左右ヘ地ヒラキ左ノ袖カヘス●御まもり物ある中左右ヘ地ヒラキ●月そのをふふ二人共正ヘ出ヒラキ扇タヽミナカラ左へトリ笛座ノ上へ行右へトリ正向二人立ナラビ二人ヒゲトヒチトラツキ合セ一シヨニ下ニヲル●シテノ舞働ノ内ニ扇前ニサス●たてまつらんとゝめの字ヨリ二人共一シヨニ立ワキツレノ前へ行下ニ居テ玉ヲ両手ニテ持立右へトリワキノアトニツキ入ル

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

舞臺へ入二人立ナラフ処ノ圖



後ノ方モ少シ左ノ正先へ出右ノ口ノ三ツ目ニテ柱ノキハニテ幕ノ方向ヘ向ケ左ヘトヒラク処ノ圖

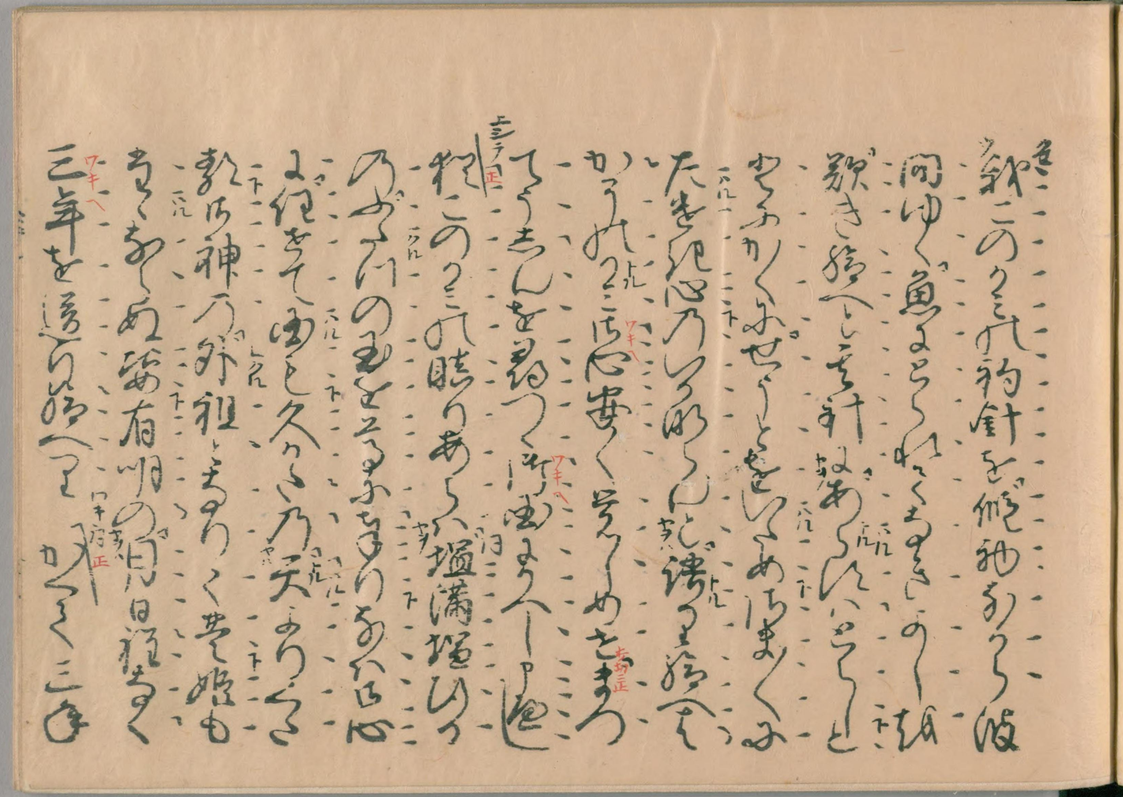


●玉ノ井半蔀ヲ二ハ不舞

●カセ杖長ク立テ乳通リヨリ二ツ三赤キ切ハ用イズ原半月ノ切ナドニテ二ツ

初ニテ舞附

●水桶右ニモテ加茂ノ通リ真ノ一声ニテ出シツメクニテツメ足ニテもりなきト謡出ス都テ高砂ノ通リ●光そうか謡キリ正●よをさゝみふツレト向合●あかうんト謡キリツヽケニテ舞堂へ入高砂ノ通ニ三足出中畧ニテ三足下リヲキシキニテふこうかきト謡出ス●某のあたツレト向合●弥々るこの井のの字ヨリツレト入替リ中へ行正●人ありとたふ正へ出井筒ノワバへ行左ニテトメ座をみまこハト左ヲ少シ引井ノ中ヲ見●先をいりかる面直ニ右へトリクツロキ中ニテ左へトリ正●某そうやワキへ●今ハ伺をとり正●さて先迫ノワキへ●実ニ審そ正●あらしめさぬハワキへ●かくその正●豊玉姫ワキへ●たゞいふもん正●つゝゐ〳〵正へ出●ゑやゑやウワキへ●やおこけて二足ツメ●打切ヨリ左へ回リニテ柱ノキハへ行●あゐくのかうる正へヒラキヒラカズ足ヨシ返ニワキへ●あ中へ来ゐこ〳〵中へ行正向下ニ居ル水桶下ニヲク後見トリ入ル●陰者の云捨ヲワキへ打切ニ正



国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

〽歳ぬれば我も又海山のほとりへし
海路乃末も絶へてあらむ 心安く
思召をはらさむ三乃宮主にましまし 海
上乃雲路はるかにまします 大鰐に
乗せ奉らせ給へと 渡地に送り付
〽ほうん真に待つを あらまし
しほ塩三乃玉のほとりに暑ちらぬ
はるかにおもしろく玉を
携へつゝく 豊姫 玉依二人の姫
宮室銀の玉を捧へみとふ
はいまも彼鈎針を持ちかへりける
はいの宮主持参を 〽あらうと
乃君の命に渡ひ奉る三乃宮主

▲大ベシ二度マクエゲカセ扶ツキツリ針ヲ左ノ手ノ小指ニ方ケテ出テ橋ガヽリ一ノ松ニテトメ謡イ出ス

ておもんを尋ねて天孫のほおまし
おそまし塩みつ塩ひる二
乃玉をさゝげて うまれより
ほと豊 葦原を奏し豊姫が
依姫は玉をさゝげ持ちて何ま
もおもる葦乃袖くかた海の
かんはしきに代世乃月も照ちよ
花乃姿雪をあゝこは此渡わなる
君のさ乃変りつひに さやこ主
海そらしうち雲はゝこゝの海は
かせ枝みどりのわたつみに波も花
風のふあしめて せんゝくと拍
子をそろへて時うつましさみおもしろい

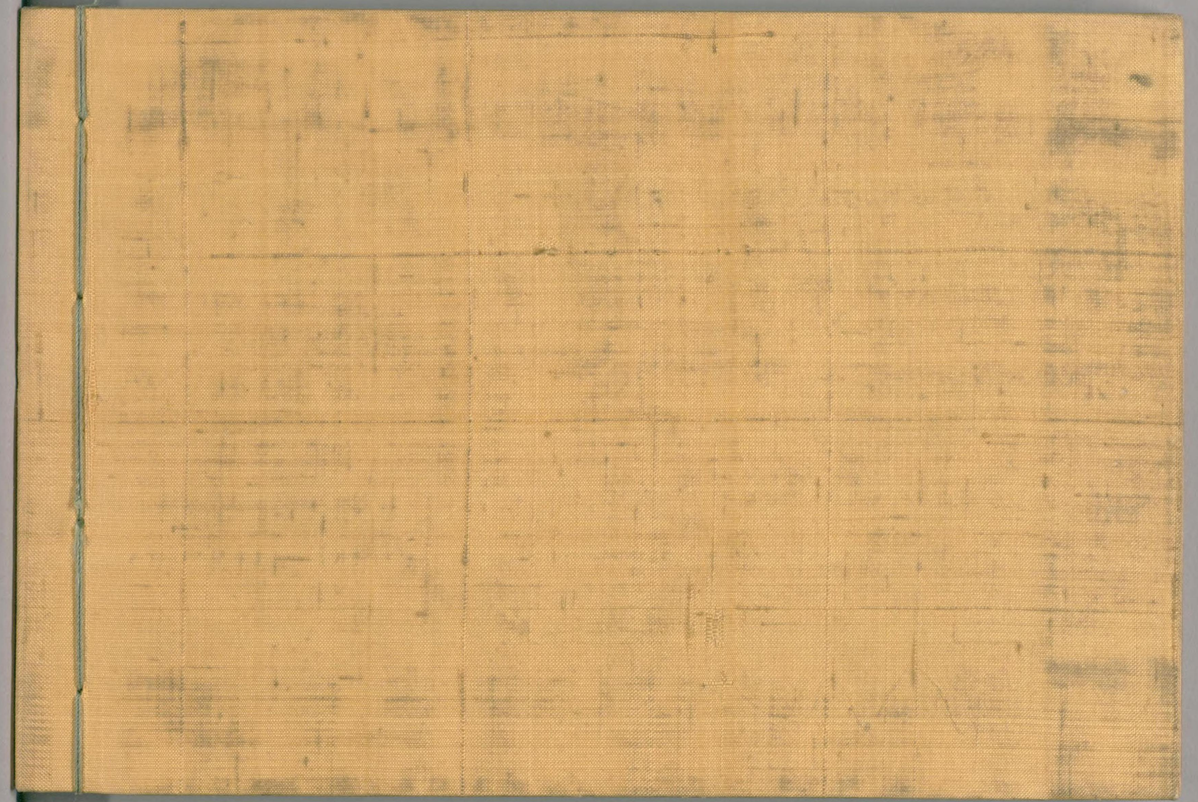
国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』 請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』 請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用